
ぼくはウルトラマン

ズラえもん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくはウルトラマン

【Nコード】

N4601E

【作者名】

ズラえもん

【あらすじ】

生活に追われ疲れきった毎日・・・ひと時の安らぎを求めベランダのロッキングチェアに腰を下ろす。目を閉じ、思い出されるのは子供の頃に空を飛んだ記憶・・・あれは夢だったのか？

☆

「君はいつたい十年以上何をやってきたんだ」

花田課長の激怒する声を聞きながら僕はうつむいたまま言葉すら失っていた。

花田課長は真っ赤な顔をして怒鳴りつづけている。

「君は与えられた仕事を完璧にこなす事は出来ないのかね、そんなことだから後輩にどんどん抜かれてしまうんだ。大体私と君は同期でこの会社に入社したんじゃないか！入社当時私は君が真面目にこつこつと仕事をする姿を見ている・・・だからこそこうして上司と部下の関係になっても出来るだけ君に大切な仕事を任せてきたんじゃないか。」

「すみません！期日までに必ず企画書をまとめてきます」

僕の口からやっとの思いで言葉が出た。

課長は「ハッッ」と大きなため息をつく

「たのむぞ・・・ほんとに、君ほどミスが多いと私もこれ以上かばいきれなくなるぞ」

僕は「はい！こんどこそ必ず満足いただける企画書に仕上げて見せます」と頭を下げ自分の席についた。

席につくと隣の席の山野がひそひそと話し掛けてきた。

「先輩はいつも真面目すぎるんですよ！ 課長の話しなんか真面目に受け止める事なんか無いんだ。先輩の事をかばうなんて言ってたようだけど、いつそんなことしてくれたんです？ 奴はあなたがミスを犯すのを楽しみにしてるんだ。だからあなたも神妙な顔をして聞く振りしながら心の中で舌でも出してりゃいいのに！ 俺なんか花田課長の小言が始まったら、いつも頭の中ではエーちゃんの音楽がガンガンなってますよ。」

僕は課長につき返された企画書を机の上に広げながら言った。

「うん・・わかってるつもりなんだけど、僕はそれほど器用じゃないんだ！ ついなんでもマジで受け止めて一人で悩んで・・・それがストレスになる事くらいわかってる。でもいちいち些細な事でも心に引っかかりいつまでもウジウジと考えてしまうんだ・・・情けないよまったく。」

山野はポンと僕の肩をたたくと「とにかく気にしないことですよ、また奴がちらちらこっちを見てるから、昼休みに付き合ってくださいよ、ゆっくり話ししましょう。」

僕は力なくうなずいた。 山野は僕より2年も後輩なのだ、それなのに先輩である僕がいつも慰められてる・・・・・なんでこうもやる事なすことから回りをしてしまうんだ？

僕の働くこの会社は主にいろいろなイベントのBGMや飾り付けなど主催者と共に企画を立て、時には司会進行などを行う文字通りのイベント企画会社である。

僕が最初に任された仕事は、ある町内の盆踊り大会のプログラム・
・・・初の企画リーダーとなった僕は張り切った。

花田課長に3人のスタッフをつけてもらい、櫓の組み立てからちよ
うちゃんの取り付け、盆踊り用の音楽テープを準備した。町内会費を
役員の人から預かり、カキ氷・金魚すくい・ヨーヨー釣りなどのセ
ッティングをおこない午後6時、浴衣姿の人々も集まり始めたので
音楽を鳴らそうと音響機器のセッティングにかかったとき、なんと
機器同士をつなぐコードがないのに気付いた！

僕は慌てた。すぐ会社に電話を入れたがどこにもコードは見当たら
ないという。そんな・・・僕は一番近い大型電気店へと飛んで
いった、機械に弱いため音響機器を両手に抱えたまま！

何とかコードを手配し現場に戻ったが開催時間が予定より1時間以
上も遅れ、主催者側からつるし上げられ花田課長からも大目玉を食
らった。

僕のミスは数え上げればきりが無い・・・自分でも嫌になるとき
がある。

このあいだ事務員の女の子から1万円札を預かり得意先の会社まで
公用でタクシーを使った。そう遠くは無い距離だ、メーターは2千
3百円。僕は運転手に預かった1万円札を支払った。

当然おつりがある・・・おつりを受け取り僕は「あれっ」と思っ
た、僕の手の中には2千7百円しかない！　どうやら運転手は僕が
差し出した1万円札を5千円札と間違えたようだ。

僕は出したのは1万円札を出した事を主張したが運転手は自分が受け取ったのは5千円札だったと言い張る。運転手は僕から受け取ったお札を左手に持ったまま右手でつり銭を出したという、そして確かに左手に握られてるのは5千円札に間違いない！

しかし僕が事務員の女の子から受け取ったのは間違いなく1万円札なんだ・・・何がどうなってるんだ？　僕がどこかで勘違いをしてるのだろうか？　いやいやそんなはずはない、僕の財布にはいつも3千円しか入っていないんだ。妻の明子がそれ以上持たせてくれなからだ！　間違えるはずがない。　だとすると運転手が故意に僕をだまそうとしてるのか？

だが運転手にはっきり断言されるともう僕は何も言えなくなる。

仕方なく会社に帰り事情を話したが、会社の仲間たちからは笑われ、当然ながら花田課長にはドジだ間抜けだとののしられたあげく、必要以上は経費とは認めてもらえず僕が後日返済する事となった。

そうなるとう度は家に帰って妻の明子から攻められる事となる！

それだけではない、同居している明子の母親までもしゃしゃり出てきていつまでもグジグジグジ説教まがいにくし立ててくる。

僕は養子じゃない、2年前明子の父親が交通事故で亡くなり老いた母親を一人ではおっては置けないからと明子から泣くように頼まれ、仕方なく同居を決めたのだ。

それなのに今では母子そろって我が物顔だ・・・「ココは僕の家だ！偉そうにするんじゃない。　気に入らなければ出て行けっ！」　そう叫びたくなるが、いざとなると何も言えない。

どうして僕はこうなんだろう？ 買い物を頼まれば見当違いのものを買って帰るし、電車に乗れば下りる駅を間違える・・・

そうだこんな事もあった、いつだったかうちの会社の近所に大きな会社が出来た。よく聞く名前の化粧品会社の会社だ。

そこに頼まれたイベント企画書を僕が届けることになった。花田課長は僕を呼び「この程度の仕事ならさすがの君でも失敗のしようがないだろう」といいながら大きな封筒を差し出したのだ。

僕は心の中で「馬鹿にしゃがって・・・」とつぶやいた。

化粧品会社につくとすぐ、僕は応接室へと通された。

しばらく待たされた後、30代と思われる男性3人と20代後半と思われる女性が現れた。

僕はテーブルの上に企画書を広げ3人の男達に説明を始めた。

一緒にいる女性は接客係だろう程度にしか思っていなかったのだ。

だがこれがまたしても間違いだったのだ・・・3人の男達の様子を見ればすぐに気付いたはずなのに、なんとも鈍感というかなんというか！

今回の企画の依頼主は僕が勝手に接客係と思い込んでいた女性その人であり、しかもこの会社の設立者・・・つまり社長だったのだ。

花田課長も人が悪い、女社長である事を一言教えてくれればいいものを。

僕は女社長に特別失礼な事をしたわけではないが、当の女社長にしてみれば内心不愉快だったに違いない！

後日花田課長から散々いやみを言われた。

僕には特にこれといった趣味はない、酒もほとんど飲まないしゴルフや釣りなどもしない。

休みの日の楽しみはマンションのベランダに置いてあるロッキングチェアに揺られながらうたた寝をする事くらいだ。

僕の棲家は築10年ほどの賃貸マンションの4階……家賃の割には結構広々としている、俗に言う3LDKというやつだ。

そこに僕と妻の明子、今年中学2年生になる娘の道子、そして明子の母親との4人で暮らしている。

妻の明子とは今の会社で知り合った！ 出会った当時の明子は物静かで、一緒にいると心が安らいだ。

その頃からミスの多かった僕が落ち込んでいると、いつもやさしく元氣付けてくれた。

ぼくが明子との結婚を決意するまでにさほど時間はかからなかった！

明子と結婚してすぐに道子が生まれた。それと同時に明子が強くなった。まさに母は強しというやつか……。娘の道子も小学校の低学年くらいまでは僕とお風呂に入ったり、その日の学校での出来事などをニコニコしながら僕に話してくれたものだ、座ってる僕の背中にしがみついたり膝の上に乗ってきたり……。可愛か

った。それが今では言う事を聞かないどころか僕を避けるようになった！　何が気に入らないんだろう？　僕には心当たりなどない。

そんなわけで家にいても会社においてもガミガミと口うるさく言われる、僕はどこにいても心が休まるときがないのだ！

そんなある日、僕はその日会社を休んだ！　何の連絡もいれずに・・・その日は大事な会議があった、僕は出席したくなかった。　どうせまた花田課長にあれこれといやみを言われるだけだ。

今まで一度もずる休みなどしたことがない僕を、妻の明子は心配しているようだったので、僕は頭が痛いのだと嘘をついておいた。

いまごろ花田課長のやつ真っ赤な顔をして誰かに八つ当たりしてる事だろう。

もうどうだっていい！　あんな会社未練なんかない、僕も男だ家族の生活くらい何をやっても守り通して見せるさ、そうすればきっと明子だって僕を見る目が変わるはずさ。

こうして一大決心をした僕は、現在のたった一つの安らぎの場・・・つまりマンションのベランダのロッキングチェアに座り、いつものように子供時代を思い出していた。

そうなんだ、僕は子供の頃はこんなじゃなかった、自由に野山を駆け巡る明るく元気な子供だったんだ。



昭和35年、僕が生まれたのはのどかな山間の小さな村、一步表に出れば見渡す限り山と田んぼばかり。

家の前には田んぼに水をひくための用水がある、初夏の頃にはおたまじゃくしやザリガニなどがたくさん住んでいた。

梅雨時には毎日かえるが合唱し、夏にはセミの泣き声がうるさいほどに耳につく、家の裏は竹やぶ・・・風が吹くたびにざわざわと騒ぐ！

こうして目を閉じるとその風景がはつきりと脳裏に浮かんでくる。

家は木造で床が高く、床下には芋倉がありいつでもサツマイモがあった。

僕に物心がついたときにはココが自分の家となっていたのである。

会社勤めをする父親とパートに出る母親、父は造船所で業績を上げているいわばエリートだった。

父は夕方5時半には帰宅しては、いつも同じ場所に座りテレビを一等席で見ていた。

それに比べ今の僕は自分の家でも居場所がない！

たまに父の会社で作っている新造船のプラモデルをもらってきてくれる。

だけど僕には作らせてくれなかった・・・いや進められても作れなかっただろうけど。

でも父はいつも僕の前でプラモデルを組み立ててくれた。「ココにボンドをつけてこれとこれを張り合わせて・・・」なんて細かく説明しながら。

僕はそんな父の側に座りほお杖をついたままじっと見ていた。

父は手先が器用だ、日曜大工などお手の物で何でもあつという間に作り上げた。僕はそんな父の器用さを受け継いでいる。

そうなんだ！ 今の職場では僕は暗くて失敗ばかりのダメなやつかもしれないが、父親譲りの器用さを生かせるような仕事につけたいんだ。

僕は改めて自分にそう言い聞かせた。

父は休みの日になると僕をバイク（当時はバタバタと呼んでいた）の後ろに乗せて走ってくれた。僕はなぜかトンネルが好きだった、父はトンネルのある道を選んで走ってくれていたが、僕のほうはしがみつくの必死でろくに景色など見ていなかったのだが・・・！

僕の母は働き者だった。

僕が幼稚園に入園するまでは自転車の後ろに僕を乗せて毎日10キロ近い道のりを職場まで通った。

僕はというと、母の仕事が終わるまで一日中一人で遊んでいた。

いったい一人でどうやって時間を過ごしていたのか、ほとんど覚えていない。

じいちゃんは若い頃旅回りの役者をしていたと聞いている！

でも僕が覚えているじいちゃんは桶職人だ。板を削って丸く組み合わせ、それに底板を取り付け、竹で編んだ枠を打ち込む・・・それだけで水が漏れないのだ！

それをノコギリとノミとカンナだけで作り上げるのだから、今から思えばすごい技術である。最近の大工などではまねの出来る人はほとんどいないと思う。

ばあちゃんは心理教とか言う神様を信仰していた。

近所やその筋ではかなり信頼されていたようで家には大きな祭壇もあった。月に一度は家に病で悩んでる人たちが集まり、ばあちゃんは白装束で祈ったりしていた！

祭壇の横で釜を焚き、その釜がウォンウォンとうなる音が今でも耳に残っている。

ある日腹痛を起こした僕はばあちゃんに泣きついた。ばあちゃんはすぐさま祭壇の釜で湯を沸かし、お供えしてあった盛り塩をそのお湯に入れて僕に飲ませてくれた、なんと不思議な事かそれで腹痛がおさまったのである！

あの時は本当におどろいた！ いやそれどころかおばあちゃんは神様の使いの人だとマジで思っていた。

★

僕は側においてあったタバコに火をつけた。こうしてタバコを吸いながらロッキングチェアーの小刻みな揺れに身を任せ子供時代を思い返すのが、僕にとっての癒しであり社会の荒波を乗り越えるエネルギーになるのだ。

僕はタバコの煙を胸いっぱい吸い込み、ゆっくりと吐き出しながら再び目を閉じた。

☆

その出来事は昭和41年、僕がまだ小学一年生のころの頃の出来事だった。その頃テレビでウルトラマンを放送していた。

僕は好きだった、今風に言うところとハマッテいたとでも表現するほうがわかりやすい、ある日僕は家の東側にある小さな柿の木の下で一番下の枝の付け根あたりからウルトラマンになったつもりで飛び降りて遊んでいた。

おやつに買ってもらったマーブルチョコレートの筒を、ハヤタ隊員がウルトラマンに変身するときに使っていたベーターカプセルに見立てて……

木に登るときはサンダルを脱ぎ裸足でよじ登る、枝の高さはわずか

1メートル足らず、しかし当時の身長から考えて本人はかなり高いところから飛んでいたつもりだろう！

幸い地面は畑として使っていたので比較的やわらかかった、枝に登り空を見上げてはシュワツチと叫びながら何度も何度も、飛び降りてはまた登りを繰り返して。

最初は飛び降りる場所、つまり足元を確認してから飛び降りていたが、慣れてくるとテレビのウルトラマン同様に上を見上げた姿勢のまま飛び降りられるようになった。

そんな事を何度か繰り返していたときその事件はおきた！！

「シュワツチ」叫び声と共に大きくジャンプした僕は不思議な感覚を覚えた、いつもならすぐに地面に足がつくの足の下に地面の感覚が無いのだ！

下を見るとさっきまで僕が登っていた柿の木が見えた。「やったっ！　僕はほんとに空を飛んでるんだ。」からだが軽い、僕はそのままゆっくりと家の周りをまわってみた。

僕はふわふわと飛んでいる、ウルトラマンのように早くは飛べないみたいだ。飛びながら時々自分の手を見た、そこには間違いなく僕の手がある。

今度は振り返るように自分の足を見た、泥んこの裸足のままの足がある。

うれしかった、きっと僕はこれ以上は無いというような笑顔になっていたと思う。

ふわふわと旋回を繰り返しながら家の屋根より高いところまで上ってみる！

初めて自分ちの屋根瓦がセメントで出来てる事を知った、裏山の竹やぶを飛び越えて山の一番上まで行って見ることにした。

もちろんそんなところに行った事が無い、山のとっぺんがどうなってるのかなんて考えても見なかった。

途中まで来たとき僕は妙な物を見つけた。

木と竹が邪魔ではっきりとは見えないが山の中腹に規則正しく並べられた石のような物が見える。

「なんだろう？」僕はそれが何か確認せずにはいられなかった！

少しずつその石のような物に近付いていった・・・そしてそれが何かわかったとき僕の心の中は恐怖心でいっぱいになっていたのである。

僕がそこで見たもの、それはかなり古い物だと感じさせる苔むした墓石だったのだ。

傾いた物もあれば、崩れかけた物もある。

僕は怖がりなんだ、夜トイレも一人でいけない。確かに当時の

トイレは薄暗く陰気なイメージがあった、もちろん水洗など無い！しゃがんで下を見れば汚物が丸見え・・・いわゆるポットン便所というやつだ。

夜中に腹具合でも悪くならうものなら必ず母を起こして終わるまで側で待ってもらっていたものだ。

そんな僕だから古い墓石など見ようものならひとたまりも無い！
すぐさま向きを変え家のほうに帰ったのはいうまでもない。

家に帰り今度は居間の窓から部屋の中を覗いて見た。背の高い洋服たんすがある、その上にはせんべいの空箱……。そのせんべいの空箱の後ろに隠れるように何かある！なんだろう？そう思いながら窓に近付いた。

僕はそれに見覚えがあった。それは先日母が探していた父と母の結婚記念のアルバムだった。

「あった……。あんなところにあっただ！」僕はうれしくなり母に知らせようと窓から離れようとしたときだった、突然頭のとっぺんに激しい衝撃を受けた。

今思えばそのとき僕は家の軒か何かにぶつかったのだと思う。

そしてその後は記憶がはつきりしない、なぜなら僕は寝室の布団の中で目覚めたからだ。

僕が目を覚ますと側におばあちゃんがいた。僕はおばあちゃんに尋ねた。

「僕はどうして寝てるの？　僕ウルトラマンになって空を飛んでたんだよ」

するとおばあちゃんは「おまえは居間の窓から飛び降りて下にあった石に頭をぶつけて泣いてたんだ、もうあんな事したらだめだよ。」とやさしく僕の顔を覗き込んだ。

僕はおばあちゃんにウルトラマンになって空を飛んでたことを説明したが、夢を見ていたのだと笑われた。

あれは本当に夢だったのか？　僕は納得がいかず翌日柿の木のところに行って見た。

なんとそこには僕が脱いだサンダルがあったのだ！

居間と柿の木は5メートル以上はなれてる・・・居間の窓から落ちたのなら柿の木の下にサンダルがあるはずはない。そう思い今度は居間に入ってみた。踏み台を探したんすの上を見た、そこには確かにせんべいの空箱がある、その後ろにアルバムがあるはずだ。

僕はせんべいの空箱を下ろしてアルバムのあった場所へと手を伸ばした。

そこは大人でも見えない高さだ、それこそ窓枠の上のほうから覗かなければ見えなかったと思う。

そして、なんとあったのだ。手の先に確かに分厚いアルバムのような手ごたえがある。

僕は踏み台の上で爪先立ちになりアルバムをつかもうとしたが、もう少しのところが届かない！

「まあいいか、母さんが帰ってきたら教えてあげればいいや」

僕はそう思い居間から出た、しかし母が帰ったときテレビに夢中になっていた僕はもうすっかりアルバムの事など忘れ去っていたので

あった！

あの時指の先に触れたが本当にアルバムだったのかどうか今でもわからない！

次の年におばあちゃんが倒れた！

おばあちゃんは半身不随となり、寝たきりの生活が続いていた。そんなある日、僕は友達の家から自転車で自宅へと帰っていた。

自転車はスピードに乗り頬をなでる風が心地よかった。そしてもうすぐ家に到着というとき、僕は何気なく空の雲を見た。

そのとき僕の身体はまたしてもふわりと宙に浮いたのだ！

「あっ！また変身した。またウルトラマンになれたんだ。」

僕は両手を伸ばし右に左にと旋回しながら飛び回った。

「やっぱり夢じゃなかったんだ。僕は飛べるんだ！」

僕が柿の木事件のときを思い出しながら旋回を続けていたとき、家のほうから誰かが歩いて来る。

「誰だろう？」　僕はその歩き方に見覚えがあった！　「おばあちゃんだ・・・おばあちゃん歩けるようになったんだ。」

おばあちゃんはニコニコ笑いながら僕に手を振っている。

「やったやった！ おばあちゃん直ったんだ。」

そう思ったとき、僕は目に見えない壁のような物にぶつかり気を失った。

目を覚ましたのは寝室の布団の中。 なにやら家の中があわただしい。

おまけに頭がズキズキする、触ってみると大きなコブがあった。母が目を覚ました僕に気付き側へとやってきた。

「どう？ まだ痛いかい？」母が言った。僕は「少しだけ」と答え、どうしてココで寝てるのかを尋ねた。

母の言うには、僕は自転車での帰り道、スピードを出しすぎて用水路に落ちて泣きながらウンウンうなっていたのを、近所の人助け起こして連れてきてくれたのだという。

僕は自転車で転んだのではなくウルトラマンになって空を飛んでいたのだということを母に伝えようとしたのだが、その前に母から衝撃的な言葉を聞かされることとなったのだった！

それはおばあちゃんの死だった。

おばあちゃんは今ちょうど僕が友達のうちから帰ってる頃に息を引き取ったという。だとすると僕があの時空から見たおばあちゃんはお化けだったのか？

そう考えたら僕は急に怖くなり、布団に潜り込んでそのまま眠りかけていた。

翌日庭に泥だらけの自転車があった！ 用水に落ちたというのが本当でウルトラマンとなって飛んだのはやはり夢だったのか？

父も母もおばあちゃんの葬儀の準備に追われ、ろくに話しも出来なかった。 そのため葬儀が終わる頃には、僕のウルトラマンの記憶も頭の隅へと追いやられていた。

☆

僕は新しいタバコに火をつけた、そして部屋の時計を見ると午前10時半を回っている。

会社を辞めるつもりなのだから部下も上司もない、恐れる事など何もないはずなのになぜか気になる。

そろそろ会議も終わりの時間だ。僕は花田課長から電話がかかりはしないかと内心はらはらしながら携帯電話を確認したが、着信音は鳴る様子もない！

やはり僕なんか必要としないんだ、いてもいなくても同じなんだ。

そうつぶやき、携帯電話を側のテーブルに置いた。タバコをもみ消し空を見上げた。

そこにはいくつもの真っ白な雲がふわふわと浮かんでいる、ゆっくりと形を変えながら風の流れに逆らうことなくふわふわと。

僕だって飛べるんだ・・・あの雲のように大空を自由に・・・！
そうか・・・あの時も空を見上げたんだ。



それは農作業の手伝いで母の田舎に行ったときだった。

母の田舎は農家で野菜や果物をたくさん作っていて、それを農協に出荷していた。母や家の人たちが農園にいつてる間僕は子犬と留守番だ。

家は山の中腹あたりにあり、家の前を細い溝が流れている。人工的なものではない、自然に出来た溝で山の上のほうから続いている。きれいな水がチョロチョロと絶え間なく流れ、水の底に細かい砂が見える。水に手を入れるととても冷たく気持ち良かった。

しばらく水遊びをしていた僕の耳に、山に続く道の上のほうから大勢の子供の声が聞こえてきた。

僕が声のするほうを見ると手にざるを持った子供達が数人僕のほうに近付いて来る。

子供は5人いた。みんな僕と同年か少し大きいくらいの子達で、一人だけ女の子がいた。

5人は僕の姿を見つけ「君どこの子？」と尋ねてきたので、僕は無言で家を指差した。

その後しばらくは質問攻めに合ったが、すぐみんなと仲良くなった。

子供達が言うにはこの溝の砂の中でシジミが取れるのだそうだ、持っていたざるはシジミをすくい取るためのものらしい。

5人の中で一人だけの女の子、名前は明美ちゃん！

明美ちゃんは僕にとてもやさしくしてくれた、自分のざるを僕に貸し与えシジミの取り方を教えてくれた。「きれいに洗って、ほらっ！これに入れて」 明美ちゃんはそう言うどビニール袋を差し出した。僕が受け取り、取れたシジミを袋に入れてみると、4人の男の子はお昼だといって帰っていった。

明美ちゃんは僕に「君はお昼ご飯どうするの？」と聞いてきたので、僕は「お母さんが昼には一度帰ってくるから。」というど、「私の家あそこよ。」と二軒先の家を指差して「じゃあ私達も帰ろう！」と僕の手をひいて歩き出した。

明美ちゃんは「あとでシジミのお汁を持ってったげる！」そう言うてシジミの入った袋を僕の顔の前に差し出した。

そして約束どおり明美ちゃんはやって来た。シジミのお汁美味しかった！

明日も遊ぼうと約束をしてその日は分かれた、だが残念ながら翌日は雨で遊ぶ事は出来なかった。

そしてさらにその翌日、外は曇り空……だが何とか降らずに持ち直しそうだ。僕は庭に出てまた一人で子犬と遊んでいた。

僕は庭の隅に黒い糸のような物が動いてるのに気付き、近付いてみた。それは蟻の行列だった。

どこまで続いてるんだろう？　僕は蟻のあとをついて行って見たが、蟻は縁の下に入ってしまった突き止めることは出来なかったのだ。

僕がそろそろ退屈になりかけた所に明美ちゃんがやって来た。

僕より少し年下と見える男の子の手をひいて……「この子私の弟なの、これから裏山にヤマモモを採りに行くんだけど一緒に行く？」

明美ちゃんは言った。もちろん僕は「うん！」とうなずき、明美ちゃんに言われるままにヤマモモの入れ物を用意した。

入れ物といっても庭の水道のところに転がっていたワンカップの空き瓶だが。

それをもち3人で裏山に登った。その裏山に続く道は母親の実家の柿山につづく道だったため、僕も途中までは何度も登ったことがある。

道は途中で二股に分かれていて、いつもの柿山とは反対の道を登った。

そこから10分ほどで目的の場所についた！　そこには小さな溜池と大きなヤマモモの木があった。

僕らのいる場所からは山の反対側が見渡せ、下には街が見える。

明美ちゃんが持っていた竹の棒でその実を落とし、僕と明美ちゃんの弟が拾った。

ヤマモモはたくさん取れた、すぐに入れ物はいっぱいになりみんなで溜池のほとりに座り笑いあった。

僕はなぜかさつき見た街の景色が気になったので、一人で立ち上がりその場から離れた。

離れたといってもほんの10メートルほどだ。

僕はしばらく町の景色に見とれていたが、すぐに二人がいるヤマモモの木の方に振り向いた……「あれっ！明美ちゃん！！」僕は小さくつぶやいた。

明美ちゃんも男の子も姿が見えないのだ。

「明美ちゃん！……」大きな声で呼んでみたが返事がない。「帰ったのかな？」

僕は怖くなった、家からそう遠くはないとは言うものの山の中に一人で取り残されたのだ。

僕は慌ててヤマモモがいつぱいに詰まったワンカップのビンを抱え、上ってきた坂道を走り出した。道は思いのほか勾配がきつく、走るスピードはどんどん早くなり足がもつた……！！

そして、僕は何かに足をとられ、前につんのめるような格好で倒れた……いや、倒れそうになったのだ。

僕は「アッ！」と叫んだ。

僕の目の前に地面が近付いてくる！

なぜか持っていたワンカップのビンと顔をかばい、とっさの思いで

身体をひねった。

身体はくると回り僕は空を見上げる形となった、そのときだ！

僕の身体はまたしても浮いた。まるで風が風を受けて急上昇するようにさっきまで僕がいた山の頂上付近まで一気に舞い上がったのだ。

「またウルトラマンになったんだ！」僕は思ったが、仰向けになったままの体がコントロールできない。

以前の経験を思い出し身体を右に左にとよじてみたが僕の上昇は止まらなかった。

どんどん空が近付いてくる。

ヤマモモの木が見えるあたりまでくるとスピードが下がり自由が効くようになってきた。

ぼくは、さっきまで怖くて青ざめていたことなどすっかり忘れて、のんびりと空中散歩を楽しんだ。

ずっと高いところまであがってみたり、山の木々にぶつかりそうなほど下りてみたり……木々に止まってくつろいでいたカラスが驚いて逃げ出した。

楽しかった。「僕はやっぱりウルトラマンなんだ!!」そう心で思った。

僕はどのくらい飛びつづけたろう……お腹が減ってきた。

そろそろ帰ろう、そう思い家のほうに向かったのだが、そこであることに気付いた！

僕がウルトラマンになったのはこれで3度目だ。　しかし一度も自分で着地した記憶がない。　気付けばいつも布団の中だったのだから！

居間の時はたぶん家の軒に、自転車のときはなんだったんだろう・・
・・でもあの時も何かにぶつかったんだ。

今度も何かに・・・そんな思いが頭をよぎったとき、木の陰からカラスの大群が飛び出した！

いったい何羽のカラスとぶつかったんだろう、案の定僕は布団の中で目を覚ます事となったのである。

目を覚ました僕は体中にびっしりと汗をかいていた！

その僕を覗き込むように母の顔があった。「起きた？　気分はどう？」

そういいながら母は僕の額に手を当て「もう大丈夫みたいよ。　熱は下がったようだから。」と言った。

大丈夫？　熱？　・・・何言ってるんだろう。

僕はさっきまでウルトラマンだったんだ、空を飛んでてカラスとぶつかったんだ。それなのに熱ってどういうことだ？

母は「汗でびしょぬれだから早く着替えてまたゆっくり寝なさい。」

そう言いながら僕を着替えさせてくれた。

僕は着替えながらさっきまでの出来事を話した。

それに対する母の答えは、とても信じられないものだった。

僕は夕べから、つまり明美ちゃんと始めてあった日の夕方から熱を出して寝ていたのだというのだ！ それに今日は朝から雨で外に出てなんかいないし、それと明美ちゃんに弟などいないし、裏山には溜池もヤマモモの木も無いという。

そんなはずはない！

僕は確かに山に登った、街の景色もはっきりと覚えてるし、空を飛んだ時の風の気持ちよさもはっきりと頬に残ってる。

翌日は熱もすっかり良くなり表に出ることが出来た。

明美ちゃんが遊びに来た。早速僕は昨日の事を聞いてみた。

だがやはり明美ちゃんは、昨日は雨で外に出ていないし山にも行ってない、それに弟はいないという！

やはり僕の夢だったのか、僕は少しがっかりした。

だが、その日明美ちゃんが帰った後で僕は外の水道の流し場ですごい物を見つけた・・・それは、なんと夢だったはずのヤマモモの実がびっしり詰まったワンカップのビンだったのだ！

☆

遠くで電話のなる音が聞こえる．．．．．その音で僕は現実の世界へと引き戻された。

僕はロッキングチェアから立ち上がりもう一度空を見た。相変わらず白い雲が気持ちよさそうに流れている。

子供の頃をすっかり思い出し僕は思った。

間違いない、僕は何度も空を飛んだんだ．．．でもそれは神様にとってはマズイ事なんだ。だから僕の記憶を夢にしようとしてるんだ。

電話が鳴り止んだ、明子が出たようだ。

廊下を歩いてくる足音が聞こえる。

僕がベランダの手すりを乗り越え空を見上げたとき、明子が子機の受話器を押さえ部屋に入ってきた。

「あなた！花田課長さんからよ．．．あなた会社は無届だっ．．．」

明子の言葉が終わらぬうちに僕の足に力が入った。

ぼくはコンクリートのベランダをちからいっぱい蹴った……！

明子は電話を放り出し叫んだ。「やめてーっ！」

その声を背中に僕の身体は大空に向かって飛び出していた。

僕の身体は一瞬落下しかけたが、すぐにふわりと浮き上がった。

僕は心の中で叫んでいた。「やったーっ！ やっぱ間違いじゃなかった、夢じゃなかったんだ。僕は僕は飛べるんだ、ウルトラマンのように飛べるんだ！！」

僕がさっきまで立っていたベランダに近付くと、明子がその場に座り込みワナワナと振るえながらこっちを見ている、焦点の定まらぬ目をして。

「あなた……どうして……」 明子の声は小さくなった。

僕は愉快になりマンションの周りを飛び回った。

マンションの屋上を越えどんどん高度を上げてみる、下を見ると渋滞中の車が子供の頃に見たアリの行列のように見える！

遠くのほうから救急車の音……どこかで事故があったようだ。

音はマンションのほうに近付いてくる。

「気の毒に誰か怪我人が出たんだな、僕のように空を飛べたら交通事故なんかに遭わないのに……」

思いながら空中散歩を続ける僕の脳裏に、初めて空を飛んだ柿の木の事がよぎった。

「そうだ！ あの柿の木どうなっただろう？」

僕は、子供の頃を過ごした田舎の風景を思い出していた。

「もう長い間帰っていないなあ・・・ ようし！ このままあの柿の木のあったところまで行ってみよう！」

そう思い、僕がくると向きを変えたとき、救急車は怪我人を積み込み走り出していた。

救急車の走り去ったマンションの下では、暇を持て余したお婆さんたちがヒソヒソトささやき続けている。

「あそこの4階のベランダから飛び降りたらしいわよ！！」

「まゝあつ！ いやゝねえ。 そういえばあそこのご主人普段かなんか暗くて近付きがたい人だったわよねえ。」

「そうそう、おまけに気の小さそうな感じで・・・それに引き換え奥さんの明子さん。 明るくて感じのいい人だったのに。」

「そうよねえ。 それに娘さん、道子さんだったっけ。 まだ中学生らしいわよ！」

「あつらゝつ！ 明子さん気の毒に・・・ご主人も罪な人ねえ。」

おぼさんたちの井戸端会議は飽きることなく続いた……

「まったく何を話してるんだか。しかし暇なやつらだな！　いつもいつもヒソヒソと人の噂ばかり良くあれだけ話すことがあるものだ……まあ僕には関係ないけど。」

僕はつぶやくと生まれ育った田舎の村に向けてスピードを上げた！

晴れ渡った空の下、頬で風を切りながら、僕は両手を伸ばし大きく一声叫んだのだった。

「シュワーツチ！」

………完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4601e/>

ぼくはウルトラマン

2011年1月14日14時29分発行